山茶花

現代俳句女流シリーズⅢ 3

伊藤いと子

牧羊社

現代俳句女流シリーズⅢ 3

伊藤いと子

茶花

牧羊社

著者略歴

伊藤いと子（いとういとこ）

1926年東京に生まれる。

1963年３月、野蒜主宰花田哲行先生より作句の手ほどきを受ける。

1965年花田先生の御紹介で、河原入会。

1972年蘭創刊と同時に入会、1974年同人。

現在蘭同人。河原同人。野蒜同人。

女性俳句懇話会会員。俳人協会会員。

現住所　東京都新宿区払方町14

現代俳句女流シリーズⅢ・3

山茶花

昭和五十六年八月二十日　発行

著　者　伊藤いと子

発行人　川島壽美子

発行所　牧羊社

東京都渋谷区渋谷二丁目十の十

電話（四〇〇）一六一四

振替　東京　九―九〇二〇二

印刷　三和印刷株式会社

製本　松栄堂製本所

定価一七〇〇円

蘭叢書第九篇

序

野澤節子

『山茶花』の巻頭に

秋近し書棚に映る草ゆらぎ

という句がある。何というやさしさのこもった句だろうかと思う。こころが和むというのか、しみじみと自分を振り返るこころもちにさせてくれる。たとえどんな大景に接しても、伊藤いと子さんの句には、このやさしみが添うている。

ユリの木の残花なれども目を奪ふ

枯山を見てゐしが飽き登りけり

富士吉田火祭

火祭の火の粉這ふ地の金魚売

どの家も富士に窓開け梅の村

梅庵清香信士の碑銘梅の郷

これらは、前出の句の近くに載っている句を少し書き出してみた。「ユリの木」の盛りの花より、残花に眩しむような目を向けたり、枯山に見飽きたのは、枯山の静かさと、あたたかさに、自分から身を触れたくなったからである。火祭の最中に、忘れられがちの地の隅の金魚売に情をかよわせ、晴れた富士に向って窓を開いている、梅の村の人々のこころをおもい、梅の郷(さと)の一隅にひっそりと建っている「梅庵清香信士」の碑を発見して、梅の村に血をかよわせている。みんなやさしくこまやかなこころくばりであり、眼くばりがなくては出来ない句である。

現代の人はとかく目立ちたがろうとする。よいところだけに身を置こうとする。いと子さんのやさしさはその反対である。「枯山」の句に感じられる心のように、人のこころづかないところ、人の面倒がることに、ひそかに自分から身を乗り出して、こまやかに動き、しかも、それを如何にもたのしそうにしている。私はいと子さんの知識の広さを、百科辞典だとひそかに敬愛している。いざ旅行をしようと考えても、さて、何時の何線に乗ればよいのか、また、着いた先の土地の案内はどうなのかと心配になると、すぐいと子さんへ電話する。その返事はいつも実に懇切、明解を極め、地理、歴史、風土にくわしい。私は安心してその通りにすればよいのである。

一巻を通して自己主張をした句、素材に摑みかかってゆくような積極的な句は少ない

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

が、いつの間にか静かに、自己の抒情の世界に素材を溶かし込んでいるのはさすがである。

杜涼し幣に結びし麻一筋
きちきちの遁れし葛も刈られけり
松虫草登山カードに年齢記し
此処よりは雲の流域山毛欅霧氷
納め繭より蛾の生れゐて冬日向
屋根替の人も古墳も夕焼くる
あたたかや塔のふたつの影のあふ
鵙日和小江戸は団子焼く匂ひ

どの句の底にも、作者のやさしく、あたたかい、息づかいがかよっているので、句が柔らかいのである。自分を詠うことの少ないいと子さんが、恥ずかし気に肉親や家族を詠った句は、しみじみとした安らぎがある。

ひびの手を父にはかくし春炬燵
腕にすがる子のまだありて初燕
朴歯下駄鳴らし戻りぬ子の良夜
父を待つ銀座の角の冬日向

喪帰りに子のやさしさや罌粟の花

初鏡吾娘のうしろに夫がゐて

米寿の父傘寿のははに日脚伸ぶ

ことに「ひびの手」「喪帰り」「初鏡」の句がよい。いと子さんだけが詠えるやさしいこころの機微である。

これらの中からベストスリーをと言われれば、躊躇なく

きちきちの遁れし葛も刈られけり

此処よりは雲の流域山毛欅霧氷

納め繭より蛾の生れゐて冬日向

をあげたい。いと子さんのやさしさの抒情が、高い詩の世界にゆたかに昂揚しているからである。

流行に右往左往しがちの時代に、派手ではなくとも自分の世界を信じて、静かにやさしく歩んでいるいと子さんの句集は、初冬に咲く山茶花にも似て、身近かで、やさしく、清らに、こころに滲みて、誰にでも親しまれ、愛されるにちがいない。

昭和五十六年八月

目次

序……野澤節子
昭和四十五年以前……9
昭和四十六年……19
昭和四十七年……22
昭和四十八年……26
昭和四十九年……30
昭和五十年……43
昭和五十一年……51
昭和五十二年……62
昭和五十三年……68
昭和五十四年以後……83
あとがき……102

装幀　山崎　登

句集

山茶花

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

昭和四十五年以前

秋近し書棚に映る草ゆらぎ

影が先に入り来る電車冬うらら

脚冷ゆるひと夜レモンの酒に酔ふ

塩蕨浸す風雪予報出て

花冷の両手に囲ふティーカップ

蒼天に山芋の枯れすすむなり

動くともなくて春雲つながりぬ

着ぶくれてくらき大河を見てゐたり

枇杷熟るる子に現はれし咽喉仏

嫁の座の永きに庭の柿熟るる

竹切りて灰皿とせり梅の宿

簾越しの竹林あをき闇つくる

城跡はただの草原　鰯雲

緋で包み琴抱きて行く枯るる中

塩あてし鯖緊まりゆく四温の夜

岳麓の旅や三日の雪に逢ふ

川島彷徨子先生

鮎網を客間に吊し冬籠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com